
ロズウェルの森の夜話

kurth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロズウェルの森の夜話

【NZコード】

N3778H

【作者名】

kurth

【あらすじ】

魔法使いの森（ロズウェルの森）で出会った老人から聞いた話を、著者（kurth）が物語に書き上げた、という設定のお話です。最強と呼ばれた不老の魔法使いロズウェルが出会った、数々の物語を第一夜から順に書き綴ります。主人公ロズウェルは様々な顔を持ちます。優しく慈愛に満ちている顔もあれば、非情で残虐な顔もあります。彼女は多くの人間と出会い、時にその優しさ、あるいはその醜さに悩みます。長命である彼女は真に人間社会の中では生きられず、それでも人間であることを止めることができない。。彼女が

感じる、他人の優しさ、醜さは自分の投影
らや人間、世界を感じていきます。
、彼女はそこから自

端書きに寄せて

この度、私とお嬢様が遭遇した数々の物語を、「ロズウェルの森の夜話」という形で本にまとめていただけることとなり、大変嬉しく思っております。

これまで、私とお嬢様、一人だけのお話だった物語を、より多くの人に知つていただける機会を得たことは、何よりの幸運であり、今はもう天の園の住人となられたお嬢様もまた、喜んでくださっていることでしょう。

私がお嬢様とお会いしたのは、本当に偶然のことでした。チエリーブロッサムの花が白に近い淡色に、満開に色づいた美しい季節であったことを記憶しております。

焦げ茶色の幹と一面の淡色のコントラストが絵画のように幻想的でした。

その絵画の中を、彼女が歩いてきたのです。
一面の淡色の花と相まって、まるで雲の上を歩いているかのように、天上人の如く楚々として私の目に映りました。

そのとき私が感じた高揚感をどのようにお伝えしたら良いのか、私はその術を知りません。ただ、私にとって彼女は、絶対的な存在感でもって、私の中の不確か不安を取除いてくれる、そんな存在に思えてならず、私はそんな神とすら思える存在に出会えたことに感動を覚えたのでござります。

絶対的な何か、これはとても不透明な言葉です。

何故なら私の言つ「絶対的な何か」とは精神に関するものであり、これはひとによつて異なるものであるからです。

宗教にこれを見出す方、友人や恋人、家族の中に見出す方、絶対

的な何かとは、どのような災厄に遭つても挫けることのない心の根底にある強い信念、信仰、信赖などを指しているからです。また生活の中にある不安や疑心についても効力を發揮することでしょう。

私にとってはお嬢様が「絶対的な何か」となったのです。

けれども、お嬢様は私と同じ「ひと」でした。（とは言え、私がお嬢様とお会いした時、私は既にこの世の者ではありませんでしたから、正確には同じではないのですが）

ただの人、と呼ぶには少々破天荒な方ではございましたが、多くの人が崇める神とは勿論違います。それでも私はお嬢様の中に、「絶対的な何か」を見出したのです。

私はお嬢様と出会い、死んでから初めて、ひとりしい感情が芽生えました。

それまでの私はただ彷徨つて亡靈に過ぎなかつたのです。私はお嬢様と出会わなければ、そのことにすら気がつかずに、いつまでも彷徨い続けていたことでしょう。

生前の記憶は今もおぼろげです。

けれども、死ぬ間際の恐怖や生きていることへの重圧感、周囲への不平不満は今も私の中できこぼすこと音を立てています。

既に生きているとは言えない私が、このような姿になつて尚、生きる目的を探すことはおかしな話に聞こえることでしょう。

けれども、もしあなたが死んで尚、意思を持つことを許されたのなら、きっと私と同じ事を考えるのではないでしょうか。

当時の私はまだ自分がどうしたいのか、そのことを深く見つめる勇気が持てずになりました。

ですが、お嬢様の傍らに存在しながら思い続けたのでござります。まずはここで生きてみようと。

これは私の第二の人生を捧げた、一人の女性のお話でござります。

アリストフル・ロエデ

第一夜 1 (前書き)

第一夜 魔法使いの幸福論

ロズウェル、と申せば、ウェズエール大陸でその名を知らぬ者はおらぬことでしょう。

ご存知の通り、最強の魔法使いに与えられる名でございますね。ウェズエール大陸が世界の中心と思われていた頃、人々はロズウェルを星の覇者とも呼び、いつからかその圧倒的な強さを畏怖するようになりました。「星王」の異称もその頃から広がつていつたと言われております。

しかしながらロズウェルに挑んだ者の多くは殺され、その姿を知る者は極僅かに生き残った者だけでした。その為、その存在を知られながらも、ロズウェルは長い歴史の中で伝説と化していったのでござります。

何を隠そう、私のお嬢様がそのロズウェルであることは、今のところ私とお嬢様だけの秘密でございます。

お嬢様は黒髪に黒い瞳、対照的に透き通るような白い肌をお持ちの、見た目可愛らしい御方で、一見したところでは、この方が最強と呼ばれる魔法使いであるなどと気付けないことでしょう。

ただし、見る者が見れば、この方が普通の女性とは違うことがわかります。

物憂げな瞳や達観した表情、何が起きても動じない精神、他者を鋭く分析する素早さは経験からくるものでしょ。

お嬢様の黒い瞳が何を見ているのか、私にはついぞ知る事が出来ません。

「出たぞー！ 大悪党ロズウェルの野郎だ！」

町で一本しかないと思われる大通りを、血相を変えた男が大声を上げながら転がるように走っていく。

男が横を通り過ぎた時、僅かながら微風が起こり、ロズウェルの短い黒髪を揺らした。

少し癖のある猫つ毛がふわりと揺れ、彼女は乱れた前髪をすぐに直した。

「最近、ロズウェルという名をよく耳にするな」

通り過ぎた男を流し目で見ながら、気のない素振りで呟く。
一二五歳を過ぎた頃に成長が止まつてからは、姿に似つかわしくない自若とした雰囲気が身についてしまっている。

老いることのない彼女は、大陸から離れた、海の魔物がひしめく危険な海域にある、誰も近寄らない小島に居を構えて一人で暮らしていた。

それでも時折こうして人の町を訪れるのは、退屈を紛らわせるためだつた。

その際、彼女は決まって東域の大衆信仰であるペネット教の巫女に変装していた。

頭に、縁からヴェールが垂れ下がつた、鍔のない円筒形の小さな帽子を載せている。これがペネット教の巫女の証だつた。着ている衣服は丈夫なりネンのワンピースで、同じく丈夫そうな革のブーツからも、旅装を思わせる。

この辺りは東西の交流が盛んな地域で、これから西域に向かう場合は東域人の格好をしていれば、話好きな西域人が色々な情報をくれるのだ。

だが今は、どんな西域人も他人に関心を寄せられる状況ではないのだろう。

見かけない巫女が自分たちが逃げる方向とは逆に歩いているとうのに、見咎める者はなかつた。

町の端から端まで歩いたところで、十分とかからないだろう小さな町は、この時分、普段であれば、昼下がりの穏やかな時間が流れていることだらう。しかしながら今日は、男が持ち込んだ知らせが瞬く間に町中に伝わり、鶏を一箇所に集めたかの如く、劈くような

喧騒が町を揺らしていた。

狭い町である。男の知らせが行き届くのに時間はかからなかつた。

しかしロズウェルはそのことに引っ掛かりを覚えていた。

ロズウェルの小指に嵌められた細工物の指輪、その中心の黄玉が淡く光る。

中から古めかしい衣装を着た初老の男が姿を現した。

「何やらひどい騒ぎでございますな」

指輪の精……というより、死靈に近い彼は、ロズウェルの旅の連れだつた。

「仕立て屋」と彼女は呼んでいた。

「大悪党ロズウェルとやらが出たらしい」

その口調はどこか嘲る調子だつた。だがすぐにそれさえもどうでもよくなつたのだろう。

「大方この辺りに出没する盗賊か山賊だらう。ちょうど街道に沿つて連なるツォザ山脈は山賊の住処になつてているという話だから、おそらく山賊の方だらうな」

興味なさそうに答えた。

ウェズエル大陸には大小様々な国がひしめき合つてゐる。これらの国々は何かある度に小競り合いを起こし、常に戦乱が絶えない。どの国の王が最初に大陸を統一するか、各国の王たちは互いに牽制し合いながら、大陸という盤上に駒を差すのに余念がなかつた。

戦乱が起これば新たな敗走兵が生まれることは必至であり、その中には再び兵役に就くことを厭い、それくらいならと山へ逃げ込み山賊を生業とする者たちがいる。また国を取られた王族が斬首を恐れてやはり山へ逃げ込み、そのまま親衛隊ともども山人になつたという話も耳にする。暫くの間は狩りなどをして食い繋ぐが、これまでの豪奢な生活からの一転に耐え切れず、その後やはり山賊と変わらない行為を行うようになる。

山は人間社会から溢れた者たちの行き着く先なのだ。

それはなにも敗戦国の出来事、というまだ身に降りかかつていな

い話ではない。何故なら、社会から溢れる理由は、戦争によるものだけとは限らないからだ。

その山から産業に必要な材料を調達しなければならないのが、この町だった。

ヒューウルネの町は大国の一つ、ハンセンの西域に位置する町だった。

交易の都ミニストに工芸品を卸している陶芸の町というだけあって、道沿いには様々な形の壺や鉢が置かれ、中に花が植えられていた。小さな町には珍しく、大通りはきれいに舗装されている。常なら人通りがあるだろう道には人っ子一人見当たらなかつた。だが張り詰めた気配がロズウェルには伝わっていた。通りに建ち並ぶ民家は先ほどの知らせによつて扉や窓が堅く閉ざされていた。中に隠れている人間がいるのだ。

閑散とした大通りに場違いに呑氣な足音を響かせる。陶製のレンガが敷かれた石畳を鳴らしていると、大勢の人間が逃げて行つた先から悲鳴が聞こえてきた。

常なら井戸端会議でも開かれているのであろう通りの真ん中にある水汲み場では、事情を知らない小鳥が数羽、ちょんちょんと跳ねていた。

「憐れな。逃げた先で敵が待ち伏せているとはね」

のんびりと洩らす。次いで、国が急げてゐるからこゝいう事態が起ころ、と他人事のように呟いた。

「ハンセンの今の王はとんだ臆病者らしいからな。敵国の侵略を恐れて、後宮の奥深くに隠れ暮らしていると聞く。己の民が山賊如きに怯えて暮らしていふといふのに、一国の王が随分と呆れたものだ。可哀想だが、王を恨むよりないな」

きょろきょろと辺りを見回していた仕立て屋は、上空から人だかりができるといふ点を指差して、

「あちらで何事か起きている様子でござりますな」と興味を示した。

それからすぐに不思議そうに首を傾げる。

「何故あのよう一箇所に固まっているのでしょうか？」

ロズウェルはそれをおかしそうに笑った。

「退路が絶たれていれば逃げたくとも逃げられないだらう。……この町は既に囲まれているようだぞ」

そして不意にその表情を曇らせた。

「如何なさいました？」

「……あの男は山賊の頭だな。捻りもなく、家畜と若い女を崎越せと言つてゐる」

「…………」

離れた場所の会話もロズウェルの耳にはすべて届いている。風の精靈を操り、風に乗せて会話を運ばせているのだ。

成り行きを見守るよう沈黙していたロズウェルは、暫くすると無言で歩き出した。

「……どうなつたのですか？」

「要望通り、差し出したようだな」

「……助けなくてよろしいのですか？」

「何を？」

「え？ 何、とは」

仕立て屋は当惑氣味に訊ね返した。彼にしてみれば、助ける対象は一つしかない。

ロズウェルはその問いには答えなかつた。

代わりに、「この町ではこういつた光景は日常的なようだな」と意地悪い顔で呟く。

「山賊の頭は随分と賢い奴のようだ。巻き添えを食つ前にさつわと出るといふやつ」

その後は無言で町の出入り口付近まで歩いて行く。到着する前から山賊と思われる人影が見えていたが、ロズウェルは歩調を緩めることなく同じ歩調で歩いて行つた。

他愛のない会話をしていた山賊たちの目が怪訝そうに彼女へ向け

られる。

不審に思うのは当然だった。

丸腰の巫女が命知らずにも自分たちに向かつて歩いてくるのだ。

「おいおい、巫女さんよ。命乞いなら神様にやってくれよ」

一人が大声で言つて、山賊たちはげらげらと笑い合つ。

柄の悪い大男が十人ほど、各自好きな武器を持つて立つている。その中の一人だけが馬に跨つていた。この中のリーダーなのだろう。男は暫くの間余裕で仲間たちとにやにや笑つて近付いてくる巫女を眺めていたが、自分たちに全く動じる様子のない彼女にだんだんと苛立ちが募つたのか、その顔をどす黒く変えていった。巨大な斧をロズウェルに定めて、馬上から居丈高に「止まれ！」と命じる。ロズウェルの歩みは止まらなかつた。

最初に異常に気付いたのは馬だつた。

忙しなく何度も足を踏み鳴らし、しきりに尻尾を振つている。息も荒くなり、後退ろうとする。

必死にその場に止めよつとしていた男が、突然、馬から振り落とされた。

派手な音を立てて腰を打つたというのに、男は逃げ出した馬を追うこともせず、近付いてくる小柄な女を引きつった顔で見ていた。男を中心にして、周りにいた仲間たちもいつの間にか男と同じ表情をしていた。武器を構えているものの、馬の恐怖に感染されたかのように、何度も得物を握り直したり、勝手に流れ落ちる汗を拭つたりしていた。

山賊たちの間合いに入る直前、ふとロズウェルは歩みを止めた。

その表情は何事かに興味を抱いたようにハツとしていた。その印象を裏付けたのは、

「ほう」

という一言だつた。

ロズウェルは来た道を振り返り、

「氣骨のある奴もいるじゃないか」

と感心して言った。

その態度に逆上したのは山賊たちだった。

「ここの女!」

「驚かせやがつて!」

口々に汚い言葉を発しながら武器を振り上げてくる。

しかし次の瞬間、辺りはしん、と静まり返った。

始めから何事もなかつたかのように。

「お嬢様、町を出られるのではなかつたのですか?」

来た道を戻るロズウェルの背中へ不思議そうな仕立て屋の声が掛かる。

「気が変わつた。無謀にも山賊の頭に挑んだ馬鹿がいるのでな。顔を拝んでみたい」

その声は楽しそうだつた。

仕立て屋は苦笑して小柄な背中に従つ。

ふと顧みた先には、いつまでも地面に染み込むことのない血溜まりが、整然と並んだ石畳に広がつていた。

「何が起きたかもわからぬ内に死ねたのがせめてもの救いでござりますな」

陽が落ちる直前の黄昏時を、町の外門を閉め忘れた男が慌てて走つていた。

彼は自分の工房を持つ一人前の職人であつたが、酒飲みで、日頃の酒代が嵩み、妻に小遣いを減らされていた。近頃では当番を替わる代わりに、門番の男に酒場で一杯奢つて貰つのが習慣となつていた。

しかし今日は町に山賊が現れ、予定していた仕事の進行が大幅に遅れてしまった。明日には焼成にかけなければならない作品が下絵付けもされないまま残っていたのだ。

町の外は夜になると魔物が現れると昔から言っていた。実際に

彼が魔物を見たことはなかつたが、夜中この世の生き物とは思えない鋭い鳴き声を聞いたことがある。魔物の存在を信じない連中は、大方、山から下りて来た獣の類だろう、と言つが、それにしても恐ろしいことには変わりない。

木製の大きな門には大昔の力ある魔法使い様が魔除けに描いたといつありがたい紋様がある。早く行って、閉めなければならなかつた。

だがその途中で、彼の足は止まつた。

闇が忍び寄る薄紫色の中、いつもと違う光景が広がつていたのだ。彼は初め、職人の誰かが原料を零したのだと思った。

真つ赤なそれは、石畳の溝に沿つて、広範囲に渡つていた。

「馬鹿な！ なんということをしてくれたのだ！」

カツとなつて彼は語氣も荒く叫んだ。

赤色は、この辺りでは赤雲が山にかかる時にしか採れない貴重なものなのだ。

赤雲から採れる赤色は、通常の貝殻虫から採取される赤色と違い、より鮮やかな発色であることが特徴である。この赤色を使って染付けされた陶器は、ローズ&ブラン、通称ウルネと呼ばれるほど有名であり、この町の高価な特産品なのだ。

これを残らず零したとなれば、尋常でない被害だつた。それどころか、村だけの責任では済まされない。

けれども、一人対策を考えている内に気が治まつてくると、彼ははたと首を捻つた。

よく考えてみれば、このところ赤雲が出たという話は聞いていい。

では、あれはいったい何だ　　そう考えて、彼はようやく少し遠い所に落ちている斧やら剣やらに気付いた。今にも消えそうな最後の夕陽に刃が煌いていた。

その光景が意味することを、だんだんと理解していく。

脳は麻痺しているのに、その光景だけは鮮明に目に飛び込んでく

る。

「…………〔冗談じゃない〕

彼は事切れた操り人形のようにな、力無く膝をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3778h/>

ロズウェルの森の夜話

2010年10月10日02時34分発行